

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

大町高等学校

2015 パミールシルクロード探検隊日本報告書

影山淳さん（名古屋山岳会）から、上記の報告書を寄贈いただいた。影山さんと長野の関係は、1976年の日本・イラン合同マナスル峰登山隊だが、その時の隊長田村宣紀さん（現長山協顧問）とのご縁で、小生もお付き合いいただいている。影山さんはその時のマナスルの登頂者である。その後、トルコ・ライアスから中国・北京までシルクロード14480kmを単独自転車車で完全踏破したという偉業を成し遂げた。その様子は「我、日本のマルコ・ポーロとならん」という本となって出版されている。詳しくは、かわらばん436号（2011.12.31）を参照いただきたいが、影山さんのマルコ・ポーロへの心酔ぶりと「東方見聞録」に対する丹念な読み込みぶりには驚かされる。研究者の間でもまだマルコがどこを通ったのか定説のない場所についても推定をし、現地の様子とマルコの記述を照らし合わせ、事実に基づいた裏付けを試みている。シルクロードの解明はまさに影山さんのライフワークだ。

そんな影山さんが立ちあげ、田村さんが会長をつとめる任意団体のシルクロードクラブ日本は、この秋パミールを訪れ日本人未踏域への入域を試みた。その探検隊の趣意には、「パミールに今尚日本人が未踏域のシルクロードが残されている。ゾルクル湖からタシュクルガンに至るルートである。古に栄えたルートは1900年代に入り、ソ連に組み入

れられた。ソ連邦崩壊後もアフガニスタンにタリバーン政権が出現した。これらの政治的な情勢で、アフガニスタン、タジキスタン領パミールへの入域が閉ざされてきた。しかし、2002年の米軍の攻撃によりタリバーン政権が崩壊したアフガニスタン・ワハーン回廊が解放された。百年待ったパミールへの入域が可能となった。しかし、ゾルクル湖～シャイマック～ネザタッシュ峠～タシュクルガンのかつて栄えたシルクロードは依然として入域禁止区域として外国人を拒絶してきた。」と書かれている。

今回の探検隊は、日本人はもとより西欧人も第2次大戦後は入域していないこの地域への入域を果たした。報告書をおこのほど送っていただいたが、その所期の目的であるタジキスタン領内のゾルクル湖からシャイマックを経て、中国国境のネザタッシュ峠までの道は、やはり許

2015 パミールシルクロード探検隊日本 報告書

古のシルクロード、日本人初踏破の記録



タジキスタン領ゾルクル湖畔 2015年8月25日

後援： 掛川市 中日新聞東海本社

主催：シルクロード・クラブ日本（掛川市・任意団体）

可からはじまり実際の踏破にいたるまで、容易ならざることが伝わってくる冒険譚だった。わくわくしながら読ませてもらった。といってもおそらく読者の方々には伝わらないかもしれない。何せ地名だって初めて聞くものばかりなのだから・・・。

僕は2001年崑崙山脈セリックラムムスターグに初登頂した。その帰路少し回り道をしてタシュクルガンまで行ったことがある。カシュガルから南西に向かい、車窓にパミールに連なるコングールの山々を眺めながらムスターグアタを回り込んだ先がタシュクルガンだった。カラコルムハイウェイと呼ばれるその道は、クンジュラブ峠をパキスタンに抜ける道。しかし、パキスタンのビザを持っていない我々が行けるのは石頭城とも呼ばれるタシュクルガンまでだった。その先に続くシルクロードに思いを馳せたことを思い出す。

タシュクルガンはタジク族の町。民族の十字路ともいべきウイグルにあって、ウイグル族やカザフ族、キルギス族などがトルコ系であるのに対し、タシュクルガンに住むタジク族だけがペルシア系であると聞いた。食べ物や食生活が少し違うのだという。そこから南へ行けばパキスタン、そして西へ行けば、影山さんたちが到達したネザタッシュ峠。・・・僕が訪れたのは2001年8月のこと。その直後の9月11日に世界貿易センタービルに2機の飛行機が突っ込み、世界は一気に暗澹たる方向へと急激にかじを切り始めたのだった。

中央アジアはいわゆるイスラム圏である。しかし、そこに住む大部分の人は善良な人々である。そんな人々の住む世界は、極めて魅力的な場所である。夢を追う影山さんの姿にまたぞろシルクロードへの憧れがうずき出した。

中信高校山岳部年報 2015 No.39

今年の中信地区の年報が上梓した。中信地区の山岳関係の8校93名の活動のまとめである。学校により活動に違いはあるが、それぞれ独自の活動をしている。

間違いなく山岳を志す生徒は増えている。しかし、数年先を見通したとき、顧問の高齢化は深刻な問題である。年金の受給年齢の関係で、再任用など実質的な定年延長がされたとしても、現在の中信地区の顧問の多くは50代であり、今顧問の育成をしておかないと15年先には顧問がいないという状況が生まれかねない。このことはまた別の機会に論じたいが、ともあれ生徒の現状を見たとき、どの学校も本当に楽しい活動をしている。

毎年のことだが、金銭的に苦しい中、貴重な記録を途絶えさせることなく、なんとか今年も発行できた。残部が若干あるので、興味のある方にはぜひお読みいただき、わずかでもカンパをいただければ幸いです。

